

南フランス・ロゼール県南部の中世ロマネスク聖堂（2）

中川久嗣

Les Églises Romanes dans la Lozère; Autour des Gorges du Tarn.

NAKAGAWA Hisashi

Résumé

À la suite de la monographie précédente, je traite ici les églises, les abbayes et les prieurés à l'époque romane ou du style roman qui se trouvent au sud du département de la Lozère, surtout autour des Gorges du Tarn. Par exemple, les communes comme Sainte-Enimie et Ispagnac. Ce pays correspond approximativement à l'ancienne baronnie de Cénaret et de Florac au moyen âge. Sur chacune de ces églises, j'analyse son histoire brève, sa forme, sa structure architecturale, ses sculptures, et ses décorations, etc.

本稿では、前稿（「南フランス・ロゼール県南部の中世ロマネスク聖堂（1）」）に引き続き、ロゼール県の南部に点在する中世ロマネスク聖堂を取り上げる。具体的には、ロゼール県南部のサン=テニミー（Sainte-Enimie）からイスパニャック（Ispagnac）までの、いわゆるタルン溪谷（Gorges du Tarn）沿いにあるロマネスク聖堂を対象とし、可能な限り知りうるものすべてを訪問調査し考察を加える。

この地域は、中世にはジェヴォーダンを支配した8つのバロニー（男爵領）のうちの「セナレ男爵領」（baronnie de Cénaret）にあたり、東寄りの地域は「フロラック男爵領」（baronnie de Florac）に含まれる。ジェヴォーダンに割拠していたこれらバロン一族は、それぞれの支配領域において拠点となる城塞を築いて強力な統治を行い、さらに支配領域内の教会に対しても司教や修道院長などに一族の者を送り込んだり、あるいは土地や財産を寄進するなどしてその影響力を維持していた。

この地域のロマネスク聖堂は、建築的にはロゼール県（ジェヴォーダン）の他の場所と同じく、概して小規模～中規模で、多少とも後の時代の改修・改築の手が加えられているものが多

く、単身廊形式、南北に付けられた小さめの祭室、多角形（五角形）の後陣、身廊や後陣の上部に並ぶモディオン、ヴシールを伴って南側（あるいは西側）に開くポルタイユ、などといった特徴が見られる。またその多くに共通するのは、後陣内部および外部に見られるアーケードに施された柱頭彫刻の様式、聖堂内部のとりわけ凱旋アーチやトランセプト交差部周辺に見られるアーチ・円柱の仕様、そしてそこに施された柱頭彫刻、身廊の側壁に見られる半円形の壁アーチなどである。

本稿で取り扱う聖堂は、前稿と同じく「ロマネスク期」といっても厳密な時代の限定はせず、11～12世紀のいわゆる盛期の「ロマネスク」期を中心として、その前後の時代もゆるやかに含めたものである。聖堂全体がロマネスク期のものから、大なり小なり一部分その時代のものが残っているもの、建築様式がロマネスク様式をとどめているもの、そして現在では遺構となっているものなども含まれる。

聖堂の配列は、便宜的に行政地域区分によって整理することとし、ロゼールの県番号（48）、大まかな地域、そして自治体（Commune）の順で番号を付した。同一のコミューンに複数の聖堂がある場合は、「a. b. c. d.」というようにアルファベットで区分した。なお、ここで言う「大まかな地域」は、以前の稿まではおおよそ行政区分の小郡《canton》ごとに整理していたが、カントンはしばしば再編されるため（直近では2015年）、前々稿からはカントンに沿ったグループ分けはやめ、文字通り地理的な「大まかな地域」ごとにまとめることとした。またコミューンさえも合併等の再編が行われることがある。本稿におけるコミューンの構成は2019年4月現在のものである。

聖堂は、本文中で建築物としてのそれを指す場合はそのまま「聖堂」とし、個別的名称としては「教会」を用いた。個々の地名や聖堂の名称については、現地の慣用のものを採用した。

採りあげる聖堂は、基本的にすべて筆者が直接訪問・調査したものである。写真画像も筆者の撮影による。誌面の都合ですべての聖堂の写真画像をここに掲載することはできない。それらは筆者開設のウェブページ（<http://nn-provence.com>）で閲覧可能である。

48.7. サン=テニミー（Sainte-Enimie）ならびにイスパニャック（Ispagnac）周辺（続）

48.7.11b. サン=テニミー／ノートル=ダム=デュ=グール教会

（Église paroissiale Notre-Dame-du-Gourg, Sainte-Enimie）

サン=テニミーのノートル=ダム=デュ=グール教会は、タルヌ渓谷にある風光明媚なこの集落にあって、一番上に位置するサン=テニミー修道院（Monastère de Sainte-Enimie [48.7.11a.]）とタルヌ川岸のちょうど中間あたりに建っており、尖頭屋根を頂く方形の鐘塔が目印である。聖堂の名前の「グール」（Gourg）は「川の濁流」の他に「水の渦巻き」といった意味もあり、ちょうどこの近く（北西へ100メートル）にある聖エニミーゆかりの「ビュルルの泉」（fontaine de Burle [48.7.11a.]）とも関わりがあるのではないかと思われる。サン=テニミー修道院に

よるもともとの聖堂の建設は12世紀のことである。ただし現存の建物の多くの部分は13世紀後半～14世紀初め頃のものとも言われる。最初は修道院を取り囲む周壁の外側に位置していたが、13世紀以降集落が拡大するとともに、拡張された周壁の中に取り込まれ、その後サン＝テニミーの教区教会となった。1985年から歴史的記念建造物（Monument Historique）に指定されている。

ロマネスク期も後期の建築によるこの聖堂は、後代の修復の手が多く加えられているものではあるが、全体として非常にシンプルな美しさを保っている。西ファサードは三角形の切妻上部のすぐ下に、半円頭形の細くて縦に長い窓が開けられ、さらにその下に二重のヴェシュールが架かるポルタイユ（扉口）が開いている。側柱などはなく、タンパンにも彫刻は施されていない。19世紀までは、このポルタイユは聖堂の北側と西側にあった墓地（現在は教会広場）に通じる出入口の役割を果たしていた。それまでの主要な出入口は聖堂の南側（西端の祭室部分）に開けられていた。この墓地は、1934年に新しい道路（route de Mende、今の県道D986）を通す工事の際にタルヌ川の対岸に移されている。

ポルタイユから中に入ってすぐ左手に聖水盤が置かれているが、これはおそらく柱頭であったものの転用と思われ、ライオンらしき動物の顔が彫刻されているのが見て取れる。聖堂内部は、横断アーチで区切られる半円筒形トンネル・ヴォールトの架かる3ベイからなる身廊に、内陣（あるいは交差部）および五角形の後陣が続く。身廊部分には南側に2つ、北側に1つ祭室（側室）が付き、さらにトランセプト様の祭室が内陣の南北にそれぞれ1つずつ付けられているので、祭室は合計で5つとなる。最も新しいものは身廊南側の入口に近いところ（西から2番目のベイ）に位置するもので、祭室の天井は高くその半円形ヴォールトの頂部は身廊を巡る水平のコーニス大きく越えるところまで達している。ただしその中程に上部が水平で下部が半円形となったアーチが架橋されていて、現在はその上にキリストの磔刑像が置かれている。先にも触れたように、19世紀まではこの祭室のところに聖堂の出入口が開かれていた。聖堂南側の3つの祭室には、それぞれ大きさが異なるが、内側に隅切りされた縦長の窓が開けられていて採光の役割を果たしている。

後陣は五角形で、水平のコーニスの上に半ドームが載る。五角形のうち左右両端の面には半円形のニッチのアーチが付き、それぞれ聖ペトロと聖ヨセフの金色に彩色された小さな立像（ともに17世紀）が置かれている。後陣の中央の3つの面には、半円形のモールディング・アーチで縁取りされ、内部に向けて大きく美しく隅切りされた縦長の細い窓が開いている。中央のそれが最も大きい。後陣の5つの面のこれらのアーチと開口部は、すべて床からおよそ120センチの高さにある水平のコーニスの上に並んでいる。

聖堂に保存されている聖像類には貴重なものが多い。身廊北側の祭室（入口から3番目のベイに開くそれ）には、14世紀（または15世紀）の聖アンナ像と、15世紀の金色に塗られたピエタがある。ヴェールを被って座った姿勢の聖アンナは、幼いキリストを抱いた立ち姿の聖母マリアを左膝の上に乗せて抱き寄せ、右手には巣に入った小鳥を持っている。この同じ祭室には、17世紀終わり頃の彩色されたキリストの木像がある。これはいわゆる「この人を見よ」（エッケ・ホモ、Ecce Homo）で、キリストは両手を縛られ頭には荆冠を被せられて立っている。

身廊をはさんで反対側（南側）の祭室には、14世紀から15世紀頃のものと思われる金色に彩色された聖母マリア像が置かれている。冠を頭に戴き、大きめのローブを着た細身のマリアは体を軽くくねらせているようにも見えてどことなく艶めかしい。左手に抱く幼子キリストは鳥を胸に抱きしめている。

トランセプト様の南北の祭室のうち、天井が尖頭ヴォールトとなっている内陣（交差部）の南側のそれには、小さな球形の彫刻装飾が付けられた円形の洗礼盤があって、それは組み合わされた4本の小円柱の上に載せられている。一方、やはり尖頭ヴォールトの天井を持つ北側の祭室の3方の壁には、Henri Constans が1955年に制作した聖女エニミーの伝説を語る色鮮やかなセラミックの壁画が埋め込まれている。向かって左側はライ病に苦しむエニミー、中央はドラゴン退治をするエニミー、そして右側は司教イレール（ヒラリウス）によって女子修道院長に任じられるエニミーのエピソードである。祭室の中央の祭壇にはこの聖女の小さな木製の立像が置かれている。これら聖像類が、フランス革命後の混乱の中で破壊や略奪の被害に遭わず今日まで保存されていることは、何にもまして幸運なことであつたと言わなければならない。

聖堂の外に出ると、側壁には聖堂北側において2カ所、南側では1カ所に扶壁が付けられている。北側では扶壁に続いて東へ向けて、大きな半円形の壁アーチがあり（その地面には線刻文字が大きく刻まれた古い石版が2つ置かれている）、さらに外側に少し張り出した祭室の壁（南側ではこうした祭室の壁が3つ並ぶ）、そして方形の鐘塔の壁と続き、最後に後陣に至る。後陣は外部にあっても五角形であり、それぞれの面にはベイの横幅いっぱい大きな半円形の壁アーチが付けられている。各面の壁アーチの高さはそれぞれ微妙に異なっている。五角形のうち中ほどの3つの各面には壁アーチの中央に半円頭形の細くて縦長の窓が開けられている。こうした後陣の意匠は、ロマネスク期の雰囲気をよく残していて美しい。持ち送りに並ぶモディオンには装飾彫刻は見られないものの、むしろそれが後陣全体に端正でシンプルな印象を与えているとも言えよう。鐘塔はこれもまたシンプルであるが、ロマネスク期よりも後の時代に、2度にわたって高さが加えられたものである。中段部と上段部に鐘を吊すベイが開けられている。

なお、このノートル＝ダム＝デュ＝グール教会の北側、セール通り（rue du Serre）をへだてた反対側には、この教会に隣接していたかつての墓地の名残がわずかながら残っている。ニッチのアルコソリウム（壁龕墓）の付けられた壁を背にして、シンプルなロマネスク風の柱頭彫刻を持つ小円柱が立てられている。

Buffière (1985) pp.541-543.; Durliat, et al. (1966) p.142.; Nougaret et Saint-Jean (1991) pp.298-299.; Trémolet de Villers



48.7.11b. Notre-Dame-du-Gourg

(1998) pp.333-335.; *RIP*.

48.7.11c. サン=テニミー／聖女エニミーのエルミタージュ

(Ermitage de Sainte Énimie, Sainte-Enimie)

聖女エニミーのエルミタージュ（隠修所）は、サン=テニミーの集落の南西すぐの断崖の中腹に、この集落を高めから見下ろすように建っている。ここにある洞窟は、聖女エニミー(Sainte Énimie) がその晩年を静かに過ごした場所であるとも言われる（彼女の生涯については [48.7.11a.] ）。このエルミタージュへは、サン=テニミーの集落に架かるタルン川を渡る橋から県道 D986 (route de Mende) を、聖女エニミーの泉 (fontaine de Burle) を左側に見下ろしながらおよそ 250 メートルほど歩き、大きな公営宿泊所 (Gîte communal) の横から《Ermitage》という小さな標識に従って山道を登ると 200 メートルほどで着く（橋から片道約 30 分）。あるいは公営宿泊所から県道 D986 をさらにそのままおよそ 400 メートルほど歩き、道路が大きく西へカーブするところからやはり《Ermitage》という小さな標識に従ってダートの細い山道を登る。およそ 200 メートルで「サン=ジャンの十字架」(Croix de Saint Jean) と呼ばれる展望テラスに出るので、そこからさらにおよそ 300 メートルでエルミタージュに到着する（橋から片道約 40 分）。

切り立った断崖の中腹にあるエルミタージュの洞窟の中には小さな祭壇があり、そこを礼拝するための石段と鉄製の階段が設けられている（ただし現在は安全上の理由からその階段には登れない）。洞窟全体を覆うゴシック様式風の縦長の建物は近代になって建てられたものである。エルミタージュを下から見上げた時の、向かって右側の半円形後陣を持つ建物は、その最も古い部分は 10 世紀にまでさかのぼるものであるとも言われる。この場所は今でも聖女エニミーを慕う人々の巡礼地であり、10 月の最初の日曜日には多くの巡礼がここを訪れる。



48.7.11c. Ermitage de Sainte Énimie

Durliat, et al. (1966) p.142.; Nougaret et Saint-Jean (1991) pp.298-299.; Trémolet de Villers (1998) p.324.; *RIP*.

48.7.11d. サン=テニミー／サン=シェリー=デュ=タルンの聖母被昇天教会

(Église Notre-Dame-de-l'Assomption de Saint-Chély-du-Tarn, Sainte-Enimie)

サン=シェリー=デュ=タルンは、サン=テニミーから県道 D907B で南へおよそ 5 キロ、タルン溪谷の中でも、岩山が両側に迫るとりわけ険しい場所にあつて、大きく蛇行するタルン川沿

いの狭い土地に、家々が肩を寄せ合うようにして建つ風光明媚な集落である。夏にはカヌーなどの川遊びを楽しむ人々で賑わう観光地でもある。地名のサン=シェリー (Saint-Chély) は、6世紀にジェヴォーダンの司教であったとされるヒラリウス (聖イレール) のことで、彼は伝説によると聖女エニミーを現在のサン=テニミーの地にあった女子修道院の修道院長に任じ、またタルン溪谷に棲んでいたドラゴンを彼女とともに退治したりしている。したがってサン=シェリーの集落の歴史もその名の通り古くまでさかのぼる。1990年代にノートル=ダム教会のすぐ東側で発掘された墓地は5世紀から7世紀のもので、その時代の小修道院 (prieuré) の墓地であったらしい。この小修道院は1155年の教会文書にサン=テニミー修道院の管理下にあるものとしてその名が見えるが、それは言い換えればオーヴェルニュにあるベネディクト派のサン=シャフル修道院 (Abbaye Saint-Chaffre du Monastier) に属するものでもあった。

サン=シェリー=デュ=タルンの聖母被昇天教会は、県道 D907B から村に入るためにタルン川にかかる細い橋を渡ってすぐのところに建っている。シンプルな切妻壁の西ファサードに、高さのある半円アーチが開く方形の塔、明るい色の石灰岩と黄色い凝灰岩で彩られた身廊や後陣などの美しい姿がすぐに目に飛び込んでくる。

西ファサードは、ゴシック期に改修されたものである。中ほどの高さの所に付けられた水平の帯で上下に分かれ、その上には半円頭形の窓、下にはポルタイユが開く。

ポルタイユの幾重にも連なる半円形ヴシュールの頭頂部には、アダムとイヴの古い柱頭彫刻 (12世紀) が転用されて埋め込まれている。2人の中には善悪の知識の木があり、そこに巻き付いたヘビからイヴがリンゴ (禁断の果実) を受け取っている。またアダムは身をそらせて (外側を向いて) イヴの誘惑から逃れようとしているように見える。この時点で2人ともすでに衣服を着ているが、その裾には褌がしっかりと彫刻されているのが見て取れる。

背の低い身廊部は、北壁に3カ所、南壁に1カ所、それぞれ扶壁で補強されている。聖堂南側では内陣と身廊部の祭室の外側に聖具室様の建物が増築されていて、これにより聖堂全体のプロポーションが多少とも損なわれている。内陣の屋根の頭頂部は身廊のそれよりわずかだけ高い。五角形の後陣は、各面に半円形の壁アーチが並ぶアーケードとなっている。そこには各アーチの起拱点をつなぐ形で水平に延びる白い石の太い帯が付けられている。持ち送りには内陣部の南北の祭室から続く丸くて太い大玉縁様のコーニス (帯) が水平に巡っている。モディオンはない。後陣の南北両端の面には半円頭形で縦長の大きな窓が開けられているが、中央の3面は埋められていてニッチである (ただし中央の面には細長い窓が埋められた跡が残っている)。かつては内陣と身廊の間に架かる凱旋アーチの上に鐘塔があったが、現在は西ファサードの隣、すなわち聖堂の南西の角に、近代になって尖頭の載る方形の鐘塔が建てられた。その



48.7.11d. Saint-Chély-du-Tarn

南面には背の高い大きな半円アーチが開けられていて、その中には鐘塔の上に登るための階段が付けられているのが見える。鐘塔南面ではそのアーチの上にさらに鐘を吊すベイが上下二段構えになって開いている（下段がベイ1つ、上段はベイ2つ）。南以外の面ではベイが開くのは上段のみである（東西は各1つずつ、北面は2つ）。

聖堂内部は単身廊形式で3ベイからなる（交差部様の内陣部のベイを含めると4ベイ）。天井は半円筒形のトンネル・ヴォールトであるが、よく見るとわずかに尖頭形であるようにも見える。ヴォールトの起拱点には後陣まで続くコーニス（帯）が巡る。身廊の西側の2つのベイでは、それぞれ南北の壁にニッチの半円形の大きな壁アーチが付けられている。側壁とヴォールトはおおよそ白く上塗りされているが、最も西のベイにある壁アーチの内部は積み石がそのまま見えるようになっている。西から3番目のベイには南北それぞれに、半円形ヴォールトの架かる奥行き狭い祭室が付く。身廊と内陣の間に付けられたいわゆる「凱旋アーチ」（勝利アーチ、arc triomphal）は、厚さのある四角いピラストル（壁柱）に、コリント様式風のシンプルな葉飾りの柱頭彫刻を持つ円柱が付き、その上に尖頭形の二重の横断アーチが架かる。ただしピラストルの上に架かるアーチにはトラス（大玉縁）が加えられているので、それを数えるなら三重のアーチとなる。北側のピラストルには木製の説教壇が作られている。身廊を区切る横断アーチは、凱旋アーチ以外のものには付け円柱や柱頭彫刻などは見られない。

祭壇が置かれる内陣はベイ1つ分を占め、天井には半円筒形ヴォールトが架かる。南北にそれぞれトランセプト様の祭室が付けられているので、この部分を交差部と見ることもできる。後陣は七角形である。最両端は何もない壁面であるが、中ほどの五面には小円柱に支えられた5つの半円アーチのアーケードが連なる。小円柱は4本あって、アーチを受ける四角い冠板のすぐ下の柱頭部分には、アカンサスのシンプルな彫刻が施されている。内陣からこの後陣にかけての意匠は、ここから直線距離にして約12キロにあるラ・パルド（ユール＝ラ＝パルド）のサン＝ティレル教会（[48.7.3b.]）のそれと非常によく似ている。ここサン＝シェリー＝デュ＝タルンでは、後陣に架かる半ドームに、青い空とそこに瞬くたくさんの星が描かれている。また後陣の中央から向かって右側の下部に花瓶に入れられた花束の壁画の跡がわずかに残されている。Verrotによると、18世紀頃のものであるという。

Balmelle (1945) p.60.; Chastel (1981) pp.26-27.; Durliat, et al. (1966) p.142.; Morel (2007) p.104.; Nougaret et Saint-Jean (1991) p.289.; Trémolet de Villers (1998) pp.318-321.; Trintignac, Alain (2012) p.442.; Verrot (1994) p.11, pp.42-43.

48.7.11e. サン＝テニミー／サン＝シェリー＝デュ＝タルンのノートル＝ダム＝ドゥ＝セナレ礼拝堂 (Chapelle Notre-Dame-de-Cénaret de Saint-Chély-du-Tarn, Sainte-Enimie)

別名「サント＝マリ＝ラ・セナレ礼拝堂」（Chapelle Sainte-Marie-La Cénaret）とも呼ばれる。この礼拝堂は、サン＝シェリー＝デュ＝タルンの集落の奥にある巨大な岩盤の下に隠れているので、見つけるのが少し難しい。聖母被昇天教会（[48.7.11d.]）から少し南に行くと、中央に鉄製の十字架が立つ広場がある。その広場の南側から《La Chapelle》の表示に従って

建物の間の細い石畳の道をタルン川に沿って 70 メートルほど進んだところで、岩場に向けて左手に折れ、さらに細い小道を 20 メートルほど行くとノートル=ダム=ドゥ=セナレ礼拝堂に至る。背後からのしかかるかのごとく迫り立つ分厚く大きな岩盤の下に、まるで張りつくようにして建っている。この礼拝堂の奥の洞窟（*grotte de la Cénarète*）は古くから泉水の湧く聖域で、伝説によると聖女エニミーも祈りのためにこの洞窟にしばしばやって来たと言われる。実際この場所からは、考古学調査によ



48.7.11e. Notre-Dame-de-Cénarét

って 6 世紀中頃の古い礼拝所の跡が見つかっている。現在ある礼拝堂はブレ・ロマネスクの要素を多少感じさせるものの、建物自体は 12~13 世紀のロマネスク期のものである。この地域を支配していたバロンであったセナレ（*Cénarét*）一族による建設とされ、この礼拝堂にその名を残している。

建物は南側が岩盤になっているので、北側の姿しか見ることができない（南側にある洞窟は現在は閉鎖されている）。聖堂北壁の向かって右寄りにゴシック様式のポルタイユ（扉口）が開いている。15 世紀のもので、外側を尖頭形のモールディングに縁取りされた同じく尖頭アーチが架かる。その頂部（要石）には、摩耗して判然としないが、左向きの羊が 1 頭彫刻されている。このポルタイユにはアーチの内側にも基壇まで下りる丸いモールディングが付けられている。ポルタイユの向かってすぐ右手には円形の聖水盤が埋め込まれている。身廊と内陣の間には近代になって付け加えられた鐘楼が立ち上がる。頭頂部は三角形で、鐘を吊すベイが 2 つ開いている。聖堂のスレート屋根は 1994 年の修築工事の際に付け替えられたものである。鐘楼を境にして向かって左側の部分は内陣の壁に相当するが、そこには上下二段に窓が開けられている。上の窓は半円頭形の小さなもの、下の窓はそれより少し大きな縦長の長方形である。この 2 つの窓は、外から見るとそれぞれ別個のもののように見えるが、内部においては 1 つの大きな隅切りされた開口部となっていて、それを後の時代になって上下二段に分けたものである。もともとこの内陣部北側の壁には出入口が開けられていたが、後に埋められて、代わりに窓が開けられた。巡礼たちはこの窓を通して礼拝堂の内陣をのぞき見ることができたのであった。

礼拝堂内部は薄暗くて、岩の下に秘められたいかにも隠れ家的な聖域といった雰囲気が漂っている。形は 2 ベイからなる小さな単身廊形式である。身廊の天井は半円形（扁平）ヴォールトで高さは低く、横断アーチなどもない。側壁には南北それぞれに半円形の壁アーチが 2 つずつ付けられている。南側のアーチにはその 2 つともに、現在は埋められてしまっているが、洞窟へのかつての出入口の跡（アーチ）が残されている。注目すべきは、身廊と内陣を分け隔てているブレ・ロマネスク風の凱旋アーチである。身廊のヴォールトの頂部からかなり下まで下

がった位置に、厚みのある扁平の半円アーチが架かり、左右の側壁からこれもまた大きく張り出た太いピラストルがこれを受けて地面まで下りている。身廊から内陣に入るための、あたかも「門」のような印象を受ける。

凱旋アーチから東側の内陣（後陣）は方形であって、これもまたブレ・ロマネスクを彷彿とさせる要素だと言える。方形の内陣（あるいは平面形の後陣）を持つ聖堂は、ロゼールでも多くはないものの、例えばサン＝サテルナン＝ドゥ＝タルタロンヌ教会（Saint-Saturnin-de-Tartaronne [48.6.18.]）の内陣、あるいはマンド大聖堂（Cathédrale de Mende [48.5.1a.]）の地下クリプトなどが思い起こされる。ここサン＝シェリー＝デュ＝タルンでは、天井は3本の横断アーチが架かる半円筒形のヴォールトとなっている。ヴォールトの起拱点には、内陣の南北それぞれの壁に水平のコーニスが見られ、その下に半円形の壁アーチが付けられている。北側の壁アーチの中には、内部に向けて隅切りされた窓が開けられている。先に触れたように、最初この部分には身廊南側の壁と同じように出入口が設けられていたが、後に埋められてその代わりに窓が開けられたのである。南側の壁アーチはニッチである。内陣の東側の壁には特に装飾などはないが、かつてそこに開けられていた小さな丸窓と、それを囲んでいた半円アーチのわずかな痕跡が残されている。内陣には祭壇はなく、現在は床に聖母マリアの立像が置かれており、その周りには、ここを訪れた巡礼者や観光客が残していった願い事を書いた数多くの紙片が、置き石とともに所狭しと並べられている。

Balmelle (1945) p.60.; Nougaret et Saint-Jean (1991) pp.289-290.; Trémolet de Villers (1998) pp.321-322.; Trintignac (2012) p.442.; Verrot (1994) p.9, pp.44-45.; BSR (2009) pp.184-185.

48.7.11f. サン＝テニミー／プラドのサン＝ジュリアン教会

(Église Saint-Julien de Prades, Sainte-Enimie)

サン＝テニミーからタルン川沿いにフロラックへ向かう県道 D907B を東へおよそ 5.5 キロでプラドの集落に至る。サン＝テニミーのコミューンでもかなり東寄りにあたる。高台からタルン川を見下ろすようにしてプラドの城（Château de Prades）が建っている。この城は 12 世紀終わり頃あるいは 13 世紀初め頃に築かれ、その後サン＝テニミー修道院の所有となった。修道院を防御する役割を果たすとともに、修道院長の居館としても使われた。16 世紀の宗教戦争の際には、マチュー・メルル（Mathieu Merle）率いるプロテスタント勢力の攻撃に抵抗し、これを撃退している。フランス革命の後、国有財産として売却され、一時は農家の倉庫として使用されるなどした。現在は個人所有の住居となっている（見学不可）。城の建物の南西角にいかめしく立つ方形の塔は建設当時のものであるという。それ以



第 2 号（2019 年 10 月）

外の現在残る館はルネサンス期のものである。

サン=ジュリアン教会は、この城とタルン川の間（城の少し西）に位置し、村の墓地の奥の斜面に建っている。12世紀頃、ここには小修道院があり、周辺に多くのブドウ畑を持っていたというが、1281年にブドウ畑ごとサン=テニミー修道院に吸収された。聖堂の西ファサードは19世紀に再建されたもので新しい。三角形の切妻屋根の頂部に載せられた大きな石の十字架も19世紀のものである。ファサード上部には丸窓が開けら

れ、その下に聖母子像が置かれ、一番下には尖頭アーチが架かるポルタイユが開いている。タンパン彫刻はなく、そのかわりにステンドグラスがはめられている。聖堂内部は3ベイからなる単身廊形式で、天井は半円筒ヴォールトとなっている。身廊の東のベイに南北に祭室（側室）が付く。そのうち南側の祭室はトラスで縁取りされたアーチの中に開いていて、そのアーチは柱頭彫刻の付いた小円柱が受ける。身廊よりも少しだけ幅の狭い後陣は五角形で、コーニスの上に半ドームが載る。この後陣は、外側もやはり五角形で、中央の面には小さな四角い開口部が付けられ、さらにその左右両側の面にはそれぞれ半円頭形で縦長の窓が開けられており、その意匠は古いロマネスク期の雰囲気をよく残したものとなっている。南側祭室の真上には尖塔を戴く方形の鐘塔が立ち上がる。四方の各面に鐘を吊すベイが1つずつ開けられている。鐘塔の上部は近代になってからのものである。

なおこのサン=ジュリアン教会には、かつてはプロセッション（行列、procession）の際に掲げられていた銀製の「プラドの十字架」（crois de Prades）が置かれていた。十字架の表と裏には唐草模様の彫金装飾が施され、十字架の中央部および十字のそれぞれの先端に、四ツ葉形の枠に縁取られた丸いメダイオンがはめ込まれている。それらのメダイオンは彩色されたエマイユで、神の子羊、聖母マリア、4人の福音書記者を表す4つの生き物、ギリシア十字などが描かれている。これらのメダイオンは19世紀のものであるが、十字架自体は14世紀にアヴィニヨンの彫金細工師によって作られ、アヴィニヨンの教皇ウルバヌス5世から贈られたものであると言われている。なお残念ながら、この十字架は現在は公開されておらず見ることができない。

Chabrol (2002) p.142.; Balmelle (1945) pp.50-51.; Buffière (1985) p.986, pp.1458-1459.; Trémolet de Villers (1998) pp.407-408.; *RIP*.

48.7.12. モンブラン／サン=ピエール教会（Église Saint-Pierre, Montbrun）

サン=テニミーから県道 D907B を東へおよそ 10 キロでタルン川を渡り、県道 D68 を 1.5 キロほど南へ向けて登る。イスパニャックからだだと東へ約 9 キロの距離である。中世の間ここにあった城塞はすでに消滅している。サン=ピエール教会は、もともとはこの城塞の礼拝堂で、11 世紀半ばの史料にその名が見える。その後 12 世紀にはサン=テニミー修道院が所有した。16 世紀になって城とともに身廊など多くの部分が破壊されたが、16 世紀終わりあるいは 17 世紀初め頃に再建された。

聖堂の西は近代になって建てられた高さのある鐘楼壁で、鐘を吊すベイ（開口部）が上下二

段になっている（ベイは下が2つ、上が1つ）。その下にはステンドグラスのはめられた半円頭形の窓が、中心線よりもわずかに右側の位置にあり、一番下には半円アーチの架かるポルタイユが、さらに中心線から右側に寄った位置に開いている。内部は2ベイからなる単身廊で、天井には半円筒形のトンネル・ヴォールトが架かる。半円形の横断アーチとそれを受けるピラストルは太く、それに対して身廊と内陣（後陣）を分ける凱旋アーチとそれを支えるピラストルは細い。身廊の東側のベ



48.7.12. Saint-Pierre de Montbrun

イには南北それぞれに奥行き狭い祭室が付いている。祭室の天井は南北方向の半円形ヴォールトで、それぞれに内部に向けて隅切りされた窓が開いている。北側のそれは半円頭形の窓で、かつての姿を今にとどめるものである。内陣（後陣）は半円形で、コーニスの上に半ドームが架かる。聖堂内部は、身廊の側壁が薄い黄色、ヴォールトは白く上塗りされているが、内陣部分は基壇が赤、窓が開く中段が赤、そして半ドームは青く塗られている。基壇と中段には唐草模様や十字架を模した図柄の絵が描かれ、半ドームには夜空に瞬く星が描かれている。ただしこれらの上塗りや絵は近年になってからのものである。後陣の外部はやはり半円形で、その外側（東側）に方形の聖具室が増築されている。この聖具室以外の外壁も聖堂全体が薄い黄色できれいに上塗りされており、建物の古さはあまり感じられない。

Balmelle (1945) p.45.; Buffière (1985) p.1457.; Trémolet de Villers (1998) pp.405-406.; *RG.*, p.27.

48.7.13. イスパニャック／サン＝ピエール教会（Église Saint-Pierre, Ispagnac）

マンドとフロラックを結ぶ幹線である国道 N106 をフロラックの北 6 キロのところ、西のサン＝テニミー方面へ向かう県道 D907B に折れる。約 4 キロでイスパニャックに至る。タルン溪谷（Gorges du Tarn）の東の入口にあたる。ここには古代ローマ時代からすでに集落が営まれていたが、8 世紀になってイベリア半島におけるイスラムの脅威から逃れてきた人々がここに住みつき、そのことがこの街の名前の由来となったとも言われる。14 世紀に街は城壁で囲まれ、要塞化された。しかし 16 世紀の宗教戦争の時にプロテスタント勢力に占拠され、その際かなりの家屋が被害を受けている。

サン＝ピエール教会は、イスパニャックの街の南端に位置し、広場に面して建っている。11 世紀末あるいは 12 世紀前半に建設されたもので、ロゼール（ジェヴォーダン）における最も美しい聖堂のひとつであると言われる。もとはオーリャックのサン＝ジェラル修道院に属するベネディクト派サン＝ピエール小修道院（11 世紀創建）の付属聖堂であった。そのことを証する教皇インノケンティウス 2 世による 1142 年の教書に、最初にその名が現れる（街の名は

Espagniacum)。1365年にはアヴィニヨンの教皇ウルバヌス5世（ジェヴォーダン出身）が、この修道院をマルセイユのサン＝ヴィクトール修道院の管理下に移している。宗教戦争の時には、1580年にイスパニャックを占拠したマチュー・メルルと彼が率いるプロテスタント（ユグノー）の部隊によって、街とともに大きな被害を受けた。修道院の建物はその時に失われてしまい、現在は何も残っていない。フランス革命に際しては、1794年に聖堂の聖具類、聖人などの像が集められて燃やされた。1791年からいわゆる宣誓司祭（立憲聖職者）が任命されたものの、宣誓を拒否した聖職者によるミサなども密かに続けられていたようである。聖堂の修復工事は、17世紀初めにマンド司教によって始められ18世紀半ばにはいったん終わるが、それ以降も20世紀に至るまで何度も新たな修復・改修工事の手が加えられてきた。南側の側廊の外壁部分は18世紀後半から19世紀にかけて再建されたものであり、内陣の南北にあってトランセプトとして外に大きく張り出した祭室も、1853年に新たに増築されたものである。

広場（かつては墓地であった）に面した西ファサードの、厳めしく量塊感のあるその姿は非常に印象的である。全体がオークル色（黄土色）の石灰岩で建てられていて、ファサード中央には、その中に大きなアーチが開く分厚くて高さのある巨大な扶壁が張り出している（2つの分厚い扶壁の上に大きなアーチが架かっているというふうにも言える）。真下から見ると、このアーチには防御のために狭間の役割を果たしていたらしい溝が付けられているのが分かる



48.7.13. Saint-Pierre d'Ispagnac

（ル・モナステイエ [48.6.12a.] のファサードとよく似ている）。アーチの下には隅切りされフランボワイアン様式のトレーサリーで装飾された大きな丸窓、そして3重の半円形ヴェシュールの架かるポルタイユが開いている。ポルタイユには彫刻の類いは付けられていない。ただし、かつて扉の両側に並んでいた小円柱の丸い基壇が残っている。この扶壁の左右の壁には、側廊の採光のために、美しく隅切りされたロマネスク様式の半円頭形の窓がそれぞれ上下二段に2つずつ、左右合わせて4つ開けられている。ファサードの向かって右端には扶壁が少しだけ張り出している。このファサードは、上部が中央を頂点とする切妻型で、全体として大きな台形となっており、巨大な扶壁の姿とも相まって、全体的に厳めしくもどっしりと安定した印象を見るものに与える。Trémolet de Villersによると、イスパニャックのこの西ファサードは、ラ・マレーヌのサン＝ジャン＝パティスト教会 [48.7.9.] とよく類似しているという。19世紀には、この西ファサードの上に、不釣り合いなほど大きな方形の鐘塔がそびえ立っていたが、幸いにして1981年に撤去され、かつての姿に戻された。

聖堂内部は主身廊の南北に側廊が並ぶ3廊式で、東端は内陣を経てそのまま主後陣と小後陣につながる。天井は尖頭形のトンネル・ヴォールトで、そこに架かる横断アーチは柱頭彫刻を持つ壁付きの小円柱が受けるが、この小円柱は側壁のほぼ中ほどまでの高さのある方形のピラ

ストルの上に立っている。身廊の南北に付けられた側廊は幅は狭いが高さがある。天井の半円筒形ヴォールト・ヴォールトに架かる横断アーチは、柱頭彫刻を持つ壁付きの小円柱が受ける。この小円柱は、主身廊側の壁のものについては主身廊のそれと同じように高さのある方形のピラストルの上に立っているが、外壁側に付けられたものは、床の基壇部から横断アーチを受ける柱頭までそのまま立ち上がる壁付き円柱となっている。ただしトランセプトの祭室と側廊を分ける最も東の横断アーチを、それぞれ身廊側の壁において受けるのは、円柱ではなく方形のピラストルである。南の側廊の外側の壁には、各ベイに内部に向けて隅切りされた半円頭形の窓が並ぶ。ここは18世紀後半から19世紀にかけて再建された部分であって、壁面も白く上塗りされている。それに対して北の側廊の外側（北側）の壁は、外部に住居が直接隣接していることもあって、最も東のベイに小さい窓がひとつ開くだけであるが、12世紀の積石面がそのまま残された西の2つのベイには、各ベイに半円形の壁アーチ（ニッチ）が残されている。

身廊とトランセプトの交差部は、四隅のトロンプの上に八角形のクーポールが載る。このクーポールのドームには中央に大きな丸い開口部（oculus）があり、そこから8本の平たい帯状装飾が、リブのように放射状に広がる。このような装飾を伴うクーポールは、プロヴァンスやオート＝プロヴァンスなどでは時折見かけるものであるが、ジェヴォーダンでは珍しい（ナスビナル [48.2.8.] やラヌエジョル [48.5.3a.] のクーポールのドームは無装飾である）。なおこのクーポールのドームには、西のベイに1カ所だけ採光のための窓が開けられている。

トランセプトを形作る南北の祭室はともに半円形で、もともとそこに付けられていた祭室よりもさらに長さ（奥行き）があるものとして1853年に増築された。半円筒形ヴォールトとなった天井はそのまま南北両端において半ドームとなり、その下には中央に小さな丸窓、そしてさらにその下に半円頭形で縦長の窓が付けられている。交差部を取り囲む四辺のアーケードのうち、北東と南東の角にある背の高い壁付き円柱には、プレ・ロマネスク様式を思い起こさせる古い組紐文様（entrelacs）の柱頭彫刻が見られる。内陣に向かって左側の柱頭は、円と四隅の角が組み合わせられた組紐、向かって右側のそれは丸いねじりが連続する組紐文様である。

交差部の東には半円筒形ヴォールトが架かる方形の狭い内陣が続く。主後陣の左右にある小後陣とは背の低い半円頭アーチの開口部によって行き来ができるようになっている。後陣には半円形平面の壁面の上に半ドームが載る。その壁面は、床から半ドーム起拱点までのおよそ3分の2という高い位置を下辺として5つの半円形のアーチが並ぶアーケードとなっている。中央の3つのアーチの中には内部に向けて美しく隅切りされたロマネスク様式の半円頭形の窓が開けられている。窓を縁取る半円アーチは、床の基壇から立ち上がる4本の円柱が方形の冠板を介して受け止めている。それらの円柱の柱頭にはシンプルな（図形的な）アカンサスの植物文様の彫刻が施されている。ちなみに聖堂内にはこの他にもさまざまな植物文様の柱頭彫刻が見られるが、先に触れた交差部の柱頭に見られる組紐文様以外は、総じてやはりシンプルで図形的な葉飾り装飾となっている。主後陣の左右にある幅の狭い小後陣は、それぞれ半円形で窓がひとつずつ開けられ、上には半ドームが載る。両方とも時代的には12世紀のものであるが、白く上塗りされているために、見た目にはあまり古さは感じられない。

ところでこのサン＝ピエール教会の中には、以前はイスパニャックで発見されたガロ＝ローマ

時代の墓石 (cippe gallo-romain) が聖水盤の台座として置かれていた。もともとは縦が約 1 メートル、横幅が 68 センチであったこの墓石には、側面に縦に長いラテン十字と、表面にキリストを表すクリスマス (ギリシア語のカイとローの組み合わせ) やアルファとオメガが刻まれていた。8 世紀までは聖堂の祭壇として用いられていたが、後の時代に縦に分割されてしまい、今は左半分がマンドのイニョン=ファーブル博物館 (Musée Ignon-Fabrem、ただし 2019 年現在閉鎖中) に保存されているが、残念なことに右半分は失われてしまっていてその行方は分からないままである。

さて後陣を外側から見るためには、聖堂をいったん出て西ファサードの向かって右側に建つ円塔からさらに聖堂南側に回ってゆく。隣接する民家の建物越しにはあるが、サン=ピエール教会の後陣の一部とトランセプトの上の鐘塔を目にすることができる。主後陣とその両側の小後陣はすべて半円形で、美しいロンバルディア帯が付けられている。ひときわ背が高い主後陣 (abside centrale) のロンバルディア帯は、内陣の側壁部分から巡らされており、小アーチが 3 つで一組となっている。またその小アーチの連なりの上にはギザギザの歯車装飾の帯が水平に連続し、さらにそのすぐ上には無装飾のモディオンが等間隔でつけられたコーニスとなって持ち送りを構成している。中央の面に付けられたロンバルディア帯のアーチを受ける 2 つの小さなコルボー (corbeau、英語ではコーベル corbel、



absidiole de St-Pierre d'Ispagnac

モディオンとも言う) には、口から蔓を吐く人物の顔と動物の顔が彫刻されているのが見える。また主後陣の各面には、ロンバルディア帯の下に、半円頭形の窓が開けられていて、中央の面と北の面では半円形の細いモールディングがその窓の上部を縁取っている (南の面のそれは摩耗していて痕跡のみが残る)。

主後陣の左右に並ぶ小後陣 (absidiole) は、南北でそれぞれ高さが異なる。北側の小後陣は、もともとは南側のそれと同じように、ロンバルディア帯のすぐ上までの高さしかなかったが、宗教戦争の時代に聖堂を要塞化するために主後陣と同じところまで高さが加えられた。出し狭間 (machicoulis) を支えるための下から上へと段々に広がる突出物 (これもまた「コルボー / コーベル」と言う) がそのままいつくも残されている。またその時代以降にさまざまに加えられた修復工事の、言わば無残な痕跡 (形や色が不揃いの積み石、埋められたアーチ、下部に開けられた出入口など) が、この小後陣には見て取れる。ロンバルディア帯のアーチのコルボー (モディオン) にも主後陣のそれと同じように、彫刻が施されているが、その文様はパルメットや花卉 (rosette) である。これはレ・ヴィーニュにあるサン=プレジエ=デュ=タルン教会 [48.7.7a.] の後陣の装飾とよく似たものであると言えよう (ただし Zodiaque によると、主後陣と北側の小後陣のコルボー彫刻のうちいくつかは 17 世紀のものである)。いっぽう、南

側の小後陣にはロンバルディア帯は付けられているものの、北側のそのような彫刻装飾はまったく見られない。ただその屋根の上、すなわちトランセプトの持ち送りには、多くのロマネスク聖堂でよく見かける図形的な彫刻の施されたモディオンが4つ残されている。この部分は古いトランセプト様祭室にあたり、19世紀に延長された部分とは壁面の様子が明らかに異なっていて分かりやすい。トランセプトの交差部の上には八角形の鐘塔が建っている。と言ってもそれは正八角形なのではなく、少しいびつな八角形である。最上部の各面に鐘を吊すベイが開けられている。この鐘塔が建てられたのは17世紀あるいは18世紀頃のことであると考えられている。

ここイスパニャックのサン＝ピエール教会は、先にも触れたように、聖堂内部のクーポールのドーム（放射状の帯状装飾）などにプロヴァンスからの影響が認められる。しかしその一方で、後陣外壁に見られるロンバルディア帯やそこに付けられたコルボー（モディオン）彫刻、そして歯車彫刻の帯といったロマネスク様式初期の装飾の仕様は、とりわけラングドックの地中海地域からの影響が強いと言われる。プロヴァンスの影響は、14世紀にイスパニャックがマルセイユのサン＝ヴィクトール修道院の傘下に入って以降、ますます強くなってゆくであろう。しかし同時にこの地が地理的にもラングドックと地中海に近接していること、そしてその地中海地域とオーヴェルニュをつなぐ古くからのルート上に位置していたことも忘れてはならない。イスパニャックのサン＝ピエール教会は、プロヴァンスとラングドックというふたつの地域からの文化的影響がひとつに融合した貴重な歴史遺産でもあるのである。

イスパニャックから県道 D31 を西へ1キロほど進み、中世の橋（14世紀）を渡って南に向かうとすぐにケザックの集落となる（イスパニャックからから見ると、タルン川をはさんでちょうどその対岸にあたる）。この集落の南の端には、14世紀にゴシック様式で建てられたノートル＝ダム教会（Église Notre-Dame de Quézac）がある。ここでは11世紀初め頃に、ジャック・ドゥルーズという名の農夫が農作業中に畑の中で木製の聖母子像を発見した。さっそくその場所に像を安置するための礼拝堂が建てられるや、その像を崇めるために巡礼が多くやってくるようになったという（先の中世の橋はこうした巡礼たちの往来を容易にするために架けられたものであった）。この礼拝堂は、さらに多くの巡礼を受け入れることができるように、1365年に教皇ウルバヌス5世によって新たにコレジアル教会として建て替えられた。しかしその後15世紀の百年戦争や16世紀の宗教戦争、そして18世紀のフランス革命といったうち続く災禍によって大きな被害を受けている。そのような訳で、建物自体は14世紀以降の時代に改修・改築の手が多く加えられているが、南西の角に付けられた大きくてがっしりとした印象的なポーチは14世紀の姿をとどめている。また教皇ウルバヌス5世の紋章が、このポーチの天井のヴォールトに付けられたリブの要石（clef）や、聖堂内の横断アーチを受けるピラストル（壁付き柱）の柱頭部分などに彫刻されている。後者の柱頭彫刻はカラフルに彩色されている。なお、11世紀に発見されそれ以来このノートル＝ダム教会に置かれて崇敬を集めていた聖母子像（黒い聖母子だったと思われる）は、1580年に隣接するイスパニャックとともにここケザックを襲撃したマチュー・メルル率いるプロテスタント（ユグノー）勢力によって燃やされてしまった。聖堂内陣の祭壇の上に現在置かれている聖母子像は、17世紀に作り直されたもの

中川久嗣

である。

Balmelle (1937) pp.16-17.; Balmelle (1945) pp.22-24.; Chastel (1981) pp.10-11.; Durliat et al. (1966) p.133.; Nougaret et Saint-Jean (1991) pp.347-351, pp.358-362.; Pérouse de Montclos (1996) p.257.; Ribéra-Pervillé (2013) pp.109-110.; Trémolet de Villers (1998) pp.397-403, pp.404-405.; Trintignac (2012) p.75.; Verrot (1994) pp.12-18.; *GV*.; *RIP*.

参考文献と略記号

Balmelle, Marius (1937) : *Répertoire archéologique du Département de La Lozère, Périodes gallo-*

romaine, Montpellier, Imprimerie de la manufacture de la charité.

Balmelle, Marius (1945) : *Répertoire archéologique du Département de La Lozère, Périodes Wisig-*

gothique, Carolingienne et Romane, Mende, Imprimerie G. Pauc.

Buffière, Felix (1985) : *«ce tant rude» Gévaudan*, tome 1, Mende, Société des Lettres, Sciences et

Arts de la Lozère.

Chabrol, Jean-Paul, dir (2002) : *La Lozère de la Préhistoire à nos jours*, Saint-Jean-d'Angely,

Éditions Jean-Michel Bordessoules.

Chastel, Rémy (1981) : *Églises de Lozère*, Paris, Art et Tourisme.

Durliat, Marcel, et al. (1966) : *Dictionnaire des Églises de France, IIc, Cévennes, Languedoc*,

Roussillon, Paris, Robert Laffont.

Morel, Jacques (2007) : *Guide des abbayes et prieurés. Languedoc-Roussillon*, Lyon, Autre Vue.

Nougaret, Jean et Saint-Jean, Robert (1991) : *Vivarais Gévaudan Romans*, Saint-Léger-Vauban,

Zodiaque.

Pérouse de Montclos, Jean-Marie, dir. (1996) : *Le guide du patrimoine Languedoc-Roussillon*, Paris,

Hachette.

Ribéra-Pervillé, Claude (2013) : *Chemins de l'art roman en Languedoc-Roussillon*. Rennes, Ouest-

France.

Trémolet de Villers, Anne (1998) : *Églises Romanes oubliées du Gévaudan*, Montpellier, Les Presses

du Languedoc.

Trintignac, Alain (2012) : *Carte Archéologique de la Gaule, 48, La Lozère*. Académie des Inscriptions

et Belles-Lettres, Paris.

Verrot, Michel (1994) : *Églises rurales & décors peints en Lozère*, Chanac, La Régordane.

BSR : Bilan scientifique régional, 2009, Languedoc-Roussillon, Les Directions régionales des affaires

culturelles (DRAC) et Ministère de la Culture.

RG : *Revue du Gévaudan* (1980) , no.3, Mende, Imprimerie H. Chaptal.

GV : Guide de Visite.

RIP : Renseignements ou Informations sur Place.

Web-site

La Base Mérimée. (<http://www.culture.gouv.fr/culture/inventai/patrimoine/>) 2019.5.1 アクセス